

フレッシュな力で 産地一丸 パワーアップ

長い冬を越え収穫を迎えるレタスを見つめる佐藤啓太部会長

収穫作業に励む岡松諒さん・美佳さん夫妻
就農1年目の収穫に一段と力が入る

太平洋に面し、冬が比較的的温暖で、降雨・降雪量ともに少ないむかわ町では施設園芸が盛ん。春レタスの収穫は道内の産地でどこよりも早く3月下旬ころから始まり、ゴールデンウィークころにピークを迎える。町では積極的な新規就農者の受け入れを行い、新しい力とともに栽培技術・品質の向上に努めている。



むかわならではの無加温栽培

「産地としてまだまだだと感じています。部会一丸となって規格・品質管理をさらに徹底して、良いレタスを消費者に届けたい」と話すのはJAむかわ蔬菜園芸振興会レタス部会の佐藤啓太郎会長。ハウスでのレタスとトマトの輪作栽培、水稲と大豆などの畑作を営み、同部会88戸を束ねる若きリーダーだ。

12月に定植したレタスは冬季の間、少雪と日照時間が長いという土地の気候を生かし無加温で育てられる。



↑「春レタスの産地として部会全体でもっと良いものをという意識を向上させたい」と話す佐藤部会長



じつくりと手間と時間をかけて育てたレタスは葉の厚みがある大玉で、柔らかく、苦味が少ないと市場から高評価を受けている。また、北海道が定めた北の農産物表示制度「YES! Circle」認証を取得している。

業の連続となる。

佐藤部会長は「今年は低温で定植後苗の生育が遅かった。でも生育とともに回復して結球も良く、出来は良いですよ。初出荷は平年より早くなりました」と収穫を迎えるレタスを見つめる。

「栽培は一にも二にもハウス内の温度管理に尽きます。天気は変えられないので、天気予報や温度変化などについて細心の注意を払っています」と佐藤部会長。生育ステージで異なるがハウス内を20度から25度に保つために、収穫までの間は、晴れるとハウスを開け、曇れば閉めると小まめな換気作業の連続となる。



↑春の暖かい光を浴びグングン成長するレタス

全員の力で

「徹底した管理のもとでできたレタスは球形が良く、差がはっきりと出ます。部会内で栽培管理の均一化を図り、安定した品質で市場のニーズに応えたい」と佐藤部会長は力が入る。

部会ではJAの出荷場で週1回自主検査の目的慣らし会を行い、規格、品質管理の維持に努めている。また会員一人一人の意識を部会という一つの組織として統一化させる狙いがある。

「産地としてプライドを守るとともに市場への責任を果たさなければなりません。88戸の会員をまとめ、意識の向上を図るのも役員の役目！力が入ります。そして新しく仲間に加わった会員の力にも期待しています」と佐藤部会長は話す。

同町では新規就農者を積極的に受け入れていて、昨年3戸の農業者が誕生した。

そして2戸が部会に入り、レタスの初出荷を迎えた。

地域とともに

昨年秋に新築したハウス8棟で岡松諒さんは待望の収穫作業に汗を流す。「定植後、成長が遅く小さいままだったので出荷できるような大きさになるのか、しっかりと結球するのか毎日不安でしたが、できたレタスは部会の出荷基準を満たす大きさに育ちました。収穫のうれしさはひとしおです」と喜びをかみしめる。

岡松さんは福岡県出身、北海道大学農学部を卒業後、本州の民間企業に就職した。「自分のやりたいことを考えた時にふと農業のことが浮かびました」と振り返る。東京で開催された「新・農業人フェア」に参加し、同町の新規就農支援を知る。その後、短期農業体験と同町に移住する長期研修を経て就農した。

「研修では生産者から『早く丁寧に作業を進める、農業は時間との勝負』などしっかりと教わりました。技術だけではなく、農業に対する姿勢やこれからの生き方についてもたくさん話して頂き、この町で就農したいと強く思いました」と話しながら「研修中や現在もたくさんの方々の支援をいただいています。いろいろな方に力に



↑ 鷓川研修農場。生産者と同じように作付け計画から管理、収穫までを実践する。「生産者として収量という成果に直面して独立に向け現実的に考えることができた」と岡松さんは話す

(写真提供:むかわ町地域担い手育成センター)



↑ 農業講習会では経営や栽培技術などさまざまなカリキュラムを学ぶ。仲間同士の情報交換などの場になっている

(写真提供:むかわ町地域担い手育成センター)



↑ 「農業はおもしろい」と収穫したレタスに笑顔の岡松諒さん、美佳さん。レタスの収穫が終わると大玉トマトの定植が始まる。「今年の営農はまだまだこれからです」と2人は力を入れる

います」と話す。研修は、短期農業体験から段階的に計画され、独立を目指す実践的なプログラムも準備されている。その他に農業講習会や個別相談会も開催し、研修生のサポートに徹している。「独立就農したいからと言って、誰でも就農できるわけではありません。農家での研修中に、就農後の作付計画や資金計画を盛り込んだ就農計画を策定してもらいます。その計画を、研修中

に始まる。長い冬の間じっくりと育てられ、生産者の思いがいっぱいにつつまみずみずしいレタスは朝の光とともに全道へと届けられる。

新規就農は、むかわ町とJAなど町内の農業関係団体で設立した「むかわ町地域担い手育成センター」が中心になり、相談とサポートを行っている。平成22年の設立からの新規就農者は岡松さんを含め8組となった。同センター事務局の飛岡雅幸主査は、「生産者が自ら協議会を立ち上げ、積極的に研修生を受け入れています。町としても人口の増加、町の基幹産業の農業振興の一層の発展を目指しています」と話す。

「新規就農希望者の受け入れも生産者の協力があってこそできることです。これからも、生産者と協力しむかわ町の農業を知ってもらおう農業体験イベントを開催していきます」と飛岡主査は話す。レタス部会の佐藤部会長は、「岡松さんたち新規就農者は勉強熱心で部会の良い刺激になっています。これから部会の中にグイグイ入ってきてほしいと思いますし、将来は中心メンバーとして活躍してほしいですね」と期待する。

町全体でサポート

なっていたら大変ありがたいです。むかわ町で就農できて本当に良かった」と笑顔で話す。岡松さんがハウス隣りの作業場で仕事をしていると、次々に近隣の生産者が野菜の差し入れやハウス資材の手伝いなどに訪れ、いつも賑やかだ。

の状況や本人・家族の意思を勘案した上で関係機関と審査し、その後、独立就農に向けた研修を行うこととなります。研修中は、厳しいことを言うこともあります。将来のために頑張ってもらいたいと思っています」と飛岡主査は力強く話す。

同センターでは、東京・大阪などの就農相談会にも年数回参加し、全国の新規就農希望者の相談を受ける。また、ゴールデンウィークには、道内外から7名を受け入れて春の農業体験を行った。